

ベルゼブル論争と呼ばれる出来事は、イエスによって病人が癒される出来事が次々と起こったことで生じたようです。病人が癒されること自体は癒された人にとっては幸いなことですし、祝福されるべき出来事であったはずですが。しかし、律法学者にとってはその出来事が悪の頭（かしら）であるベルゼブルの邪悪な力によって引き起こされたものと映ったのでした。このベルゼブルという言葉は元来、異教の神の名でもあった「蠅（はえ）の王」バアル・ゼブブ¹に由来するものです。

もし神と悪魔に共通する側面があるとするならば、どちらも人間の理解を超えた不思議な力を持っていることですが、それを人間的な視点で見極めることは難しいことを本日のテキストは教えています。たとえば、競技において、技量が格段に違うときや、自分よりも劣る者を相手にしているときは、相手の心の動きや体の動きは手に取るようにわかりますが、自分よりも技量が格段に優れた者に対しては、相手の心が読めず、体の動きにもついていけないものです。ここに登場する律法学者にとってイエス・キリストはそのような、律法学者たちの理解の枠を超えた、人間的な知力では解りできない事柄と映ったからこそ、癒しの業が神の力によって為されたにもかかわらず、ベルゼブルによる仕業と映ってしまったのです。

平行記事のマタイ福音書によると、イエスが病気を癒すことを知って人々が『悪霊に取りつかれて目が見えず口が利けない人が、イエスのところに連れられて』きたのでした。イエスは彼を癒し、ものが言え、目が見えるようにしたのですが、この癒しの出来事を見て3つの反応が周囲に起こったのでした。まず、群衆は驚いて『この人はダビデの子ではないだろうか』と、イスラエルに必ず与えられると預言されたダビデの子孫であるメシアではないかと考えました。『驚いた』という反応は「狂気になる」という意味ですから、ギリシア語の原意を取ると、群衆は狂気になるほど興奮して、イエスに関するうわさがどんどん拡大していったのです。このような状況からダビデの子というメシア待望論が生まれてきたのは当たり前かもしれません。

ところが、こうした群衆の反応とは別の2つの反応が出たのです。一つはマルコ福音書3章20節以下によると、『身内の人々がイエスのことを聞いて取り押さえに来た』（3章21節）のです。群衆は気が狂ったようにメシア待望の叫びを口にしたのに、身内の者はイエスの気が狂ったと受け止めて取り押さえに来たのです。身内の者にしてみれば、気が狂ったのはイエスの方だったのです。このことはイエスの言動が既に身内の者たちにとっては気が狂ったと受けとめるほど、社会通念を大幅に超えるものであったことを示しています。ところが、律法学者たちはこれらの反応とは全く別の反応を示したのです。彼らは常軌を逸したイエスの行動とか、イエス自身の狂気性によるものだと理解せず、悪霊の頭であるベルゼブルの力によるものだと判断したのです。22節にあるように『悪霊の頭の力で悪霊を追い出している』と考えたのです。

律法学者たちはイエスの力の源を神によるものとは受け止めずに、イエスを殺すために彼の行為や人格そのものを否定しようとして、彼をベルゼブルと関連つけたのです。

¹ 先ほど申し上げたように、自分の理解の枠組みを超えた事柄に直面したとき、理

解できないことを正直に受け止められない者は自分にとって都合のいい理屈をつけることになるのです。実際、事実が何であれ、理由、原因、解説、評論、批判、言い回しなど、後からいくらかでも理屈をひねり出すことができるのが人間です。律法学者たちにとって、安息日を守らないイエスは最初から邪悪な存在であり、そのような悪人が神の御心を体現するはずがないという先入観を持っていたのです。そのような先入観がイエスを殺害する邪悪な思いを生み出していくのです。

私が牧師になるために神学校に入学する前の年、北海教区で年1回開かれる教区主催の年頭修養会で、当時、韓国の反体制派の詩人金芝河（キム・ジハ）の戯曲「金冠のイエス」を上映したことがありました。教区の教員が400人ぐらい参加する修養会で、普通は誰か講師がテーマについての発題講演をして、それについて参加者が討議するのが例年のパターンだったのですが、その年は金冠のイエスを舞台で上演して、それを発題に代えるという画期的なものでした。役者は全員素人の教員で、演劇の専門家の指導を受けて1時間以上の戯曲を演劇で上映しました。演劇の訓練をしたことのない素人が3カ月練習して臨みました。この戯曲の主人公は金冠をかぶせられたイエス像です。かつてある金持ちが現世利益のためにつくったイエスの銅像に金冠をかぶせたのですが、その金冠をかぶせられたイエス像が、社会の底辺で生きていく売春婦、重い皮膚病を患っている人、野宿人ら3人に向かって、自分を解放してくれと懇願し叫び出すところから始まるのです。3人はある寒い夜に、お腹を空かせてイエス像の前で自分たちの運命を嘆きながら肩を寄せ合って座り込んでいます。イエス像には金冠がかぶせられています。そのイエス像はある社長によって建てられたものでした。その社長は建立した際に言いました。「イエスさま、その金冠はあなたにお似合いだ。その金冠はこの世の王にふさわしい。王の中の王にふさわしい。けれど、イエスさま、その金冠は昨年のクリスマスにあなたの忠実な僕である私の寄付でつくられたということを忘れないで下さい。イエスさま、私にしかたまお金を儲けさせてくれたら、次のクリスマスには体全体を金箔で飾ってあげますよ」と言っていたのです。ところが、社会の底辺で生きていく3人の前で、そのイエス像が突然叫び出すのです。「どうか、このわたしを捕らわれの身から自由にしてくれ。解放してくれ。本当に貧しく、困難ななかで生きていく人を解放するためには、私がいまず解放されなければならぬ」と懇願するのです。社会で抑圧されている者たちを解放するためには、まず押し着せられた金冠の代わりに、差別された者たちの荊冠（けいかん）をかぶらなければならぬと訴えるのでした。だから、今かぶせられている金冠を取り除いてくれと、戸惑っている彼らに懇願するところから舞台は始まるのです。そこに、くだんの社長や悪徳神父、警官が登場してイエスの懇願を聞き入れて金冠をはずそうとする3人の邪魔をするというのが大筋の戯曲の内容です。私も出演したので、金冠のイエスは印象深く覚えています。

教会は2000年の歴史の中で、自分たちの思いをかなえるために立派な聖堂を造り、イエスに金の冠をかぶせ、本当に救いを求めている人を教会から遠ざけて来た側面があります。それは「金冠のイエス」に登場した社長のように、露骨な現世利益で信仰を理解してしまうようなものでなくても、自分の幸福や安穩のために信仰が必要だ²と考える思考の枠にとどまり続ける限り、神とイエスを自分の私有財産化する

方向にたやすく傾きやすい信仰となってしまうのです。実は、そういう信仰の危険性を自覚していないと、律法学者がイエスの癒しを見て、悪霊の頭であるベルゼブルの邪悪な力によって奇跡的な癒しの業を為したと受け止めてしまうようなことが起こるのです。

信仰者であるけれども、そんな自分の中にも利己的な心の闇があることを認めて、自分と戦い、自分自身を克服する不断の努力を生涯続けていかなければならないのです。このことに気づいていなければ私たち信仰者は易々と自己絶対化へと傾き、悪霊の支配を受けてしまうのです。悪霊は私たち人間の固定観念を増幅させ、あるがままの神の御業を捻じ曲げて解釈させ、やがては自分自身を滅ぼしてしまいます。荊の冠をかぶることは避けて通りたいからです。こうした誘惑に囚われるのは律法学者だけでなく、私たち人間の誰にも起こることなのです。この意味で、金冠という悪霊を追い出していただき、自分の栄光ではなく、神の栄光を見させていただくことを誰もが必要としているのです。